

当院で診療を受けられた患者さん・ご家族様へ
臨床研究へのご協力をお願い

当院では、以下の臨床研究を実施しています。この研究では、普段の診療で得られた情報を使用させていただくものです。この研究のために、新たに診察や検査などを行うことはありません。以下の情報を研究に用いられたいとお考えの患者さんまたはご家族の方は、遠慮なくお申し出ください。お申し出いただいた患者さんの情報は使用いたしません。また、研究への参加にご協力いただけない場合でも、患者さんに不利益が生じることは一切ありません。

経産歴と周術期疼痛管理の関係について－後ろ向き観察研究

1. 対象となる患者さん

2024年4月1日～2025年3月31日の間に当院で腹腔鏡あるいはロボット支援下婦人科手術を受けられた18歳以上の患者さん

2. 研究責任者

奈良県立医科大学附属病院 麻酔科 佐々木 由佳

3. 研究の目的と意義

手術中は様々なモニターを装着し、その値などを参考に医療用麻薬の量を調整することで、鎮静(ちんせい)(意識を抑える)と鎮痛(ちんつう:痛みを抑える)管理をしています。手術中どの程度の医療用麻薬が必要かを、血圧や心拍数の変化で判断してお薬の量を調整してきました。しかし、手術中の「痛み(あなたが実際に感じる痛みではなく、あなたの体の反応から痛がっているだろうと類推します)」を評価することは容易ではありません。実際、患者さんが「痛くないように」医療用麻薬の量を多めに使えば「痛み」は少なく済みますが、反対に手術が終わった後に気分が悪くなったり、かえって痛み過敏になったりする可能性があることも近年指摘されはじめました。痛みの感じ方には個人差があり、客観的な痛みの評価と個々に応じた対応が必要と考えられます。さらに、痛みの感じ方に性差が存在することは、これまで多くの研究で指摘されています。一般には、女性の方が男性よりも痛みを訴えやすいとされてきた一方で、出産経験を有する女性は、強い痛みを経験することで痛みが強くなる可能性があるとも言われます。加えて、女性特有の月経困難症や子宮内膜症といった慢性疼痛疾患の存在も、性差に関連する疼痛感受性の差異に寄与している可能性がある

ります。ただし経産歴の有無が、術中や術後の疼痛知覚にどのような影響を与えるかに関しては、これまでほとんど検討されていません。この研究によって、経産歴が周術期の疼痛の感じ方や鎮痛薬の使用に与える影響を明らかにになります。

4. 研究の方法

調査対象期間に奈良県立医科大学附属病院で腹腔鏡下あるいはロボット支援下婦人科手術を受けた患者さんを対象として、出産歴の有無と周術期疼痛管理の関連を後ろ向きに調査します。5. に示す情報を対象の患者さんのカルテから収集し、出産歴の有無で痛みの感じ方や痛み止めの使用状況の違いを比較します。

5. 使用する情報

患者さんから得る情報として、術前後の状態（年齢、体格、合併症、治療薬、血液検査結果など）、術式、手術中の生体情報（血圧、心拍数など）、術中の麻薬（フェンタニル、レミフェンタニル）やその他薬剤の使用量、術後の吐き気、嘔吐の発生頻度などを診療録より収集します。

6. 情報の管理責任者

奈良県立医科大学 学長

7. 研究期間

研究機関長の実施許可日～2026年12月31日

8. 個人情報の取り扱い

対象となる患者さんの個人情報は厳重に管理し、利用する情報等からはお名前や住所等、個人を特定できる情報は削除し、研究番号に置き換えて使用します。また、研究成果を学会や学術誌等で公表する際も個人を特定する情報は公表しません。

9. お問い合わせ先

奈良県立医科大学附属病院 麻酔科 佐々木 由佳
住所：奈良県橿原市四条町 840 番地
電話：0744-22-3051